



彼女が王妃になる前、体の弱い妹と田舎の村はずれでひっそりと生きていた。彼女は自分の生まれた場所も、親もしらなかった。村はずれにある彼女の家は、家というより山小屋に近かった。少女とその妹が行き着いたその家にはもともと、年老いた老婆が暮らしていた。どのいきさつでこの老婆が二人を迎え入れたか知らないが、その老婆もいつか死んだ。彼女はその老婆のことをよく知らない。老婆はあまり話すこともなければ、村の外に出ることもなかった。不思議と財産はあったようで、働かずとも食べていくことはできた。それでもその老婆が死んだあと、どこからともなくやってきた老婆の親類に、その小屋以外の財産はすべて持っていかれてしまった。彼女には、小屋と胸の病に臥せった妹、それから老婆が生涯大切にしていた鏡しか残されなかった。

彼女がある日、働きだしたのは、村からすこし離れた丘にそびえる貴族のお屋敷だった。そのお屋敷に都から貴族の娘が養生のために滞在するため下働きを募っていたのだ。しかし貴族の娘は特に体が悪いというわけでもないらしい。どうやら娘の母親がすこし前になくなり、ずいぶん気を落としているというのだ。そのため、屋敷にはすこしでも娘の話相手になれるようにと、年の頃が近いものが雇われたのだった。

少女はその貴族の娘と話すことなどないと思っていた。なにしろ彼女はただの下働きであり、娘と直接会う機会もなかったのだ。しかしひょんなことから二人は知り合うことになった。「あなたは村はずれに住んでいると聞いたけれども、そこには魔女が住んでいるというのは本当なの？」娘は彼女に尋ねた。娘は彼女が思っていたように、母親が亡くなったからといって意気消沈しているような様子には見えなかった。「あたしは、確かに村のはずれに住んでいますが、魔女など見たことはありませんでした。けれどあたしと一緒に暮らしていたおばあさんは、あまり外に出ない人だったので、魔女だと思われていたのかもしれませんが。」彼女はそう言った。すると娘はただ、にっこりと笑った。「でも、その老婆は魔法をあなたに見せなかっただけで、本当は魔女だったのでかもしれないわ？ ・ ・ ああ、でも安心して。わたしは魔女だからといってさげすんだりしないもの。」

「どうしてそこまで魔女にこだわるのです？」

彼女が娘に問うた。

「わたしは魔法を使って、大嫌いな人をこらしめてやりたいのよ。」

娘にとって、大嫌いな人というのは、

娘の父親が新しく妻に迎えた女のことだった。

「ねえ、その老婆はあなたに魔法のような言葉を教えたり、魔法の道具を残したりはしなかったの？」

少女は考えた。そして、彼女の頭の中に古びた鏡が思い浮かんだ。

「おばあさんは鏡を大切にしていました。だいぶ古いもので、装飾もなんだか気味が悪く、あたしはあまり好きではありません。」

それを聞くと娘は目を輝かせた。

「その鏡を見せてくださる？」

次の日、少女はその鏡を丁寧に布で包み、お屋敷に急いだ。

娘は少女が来るとすぐに彼女を部屋に入れた。

「まあ、これがその鏡なのね？」

娘は鏡を手にとった。

鏡は蛇や異教徒の怪物の顔のような模様が彫られており、かわいらしいものでも、美しいものでもなかった。

娘はしばらく鏡を調べたあと、なにも起こらないとわかり、少女に手渡そうとした。

そのとき、少女は鏡をうけとりそこね、床に落としてしまう。

金属のするどい音とともに、鏡は真っ二つに割れてしまった。

少女は娘に謝るとゆっくと割れた破片に手を触れた。

そのとき、鏡から真っ黒な煙が浮かび上がる。

娘は小さな叫び声を上げた。

<あなたは何をそんなに悲観している？何がそんなに憎いのだ？>

ふと、二人の少女はそんな声を聞いた気がした。

声は女とも男ともとれる、中性的な高さだったが、

どこか深い深い洞窟の中から響き渡ってくるような声だった。

娘は最初おびえたような表情をしたが、すぐに興味深そうに割れた鏡に近寄った。

<なにかが憎いのか。>

「そうよ、わたしは人が憎いわ。母の死を良いことに父と結婚したあの汚い娼婦も、このつまらない生活も。すべてが憎いわ。」

娘は割れた鏡にそういった。

<もう一人の娘はどうだ？>

娘は少女の顔を見た。

少女は鏡に顔を向けた。

「あ・・・あたしは・・・」

<おまえの中にも憎しみがある。私はすべてお見通しなのだ。>

そういわれたあと、少女はからだの中のなにかうずくものを感じた。

「あたしは・・・幸せになりたい。あたしはあたしが不幸でしかないこの世界が嫌い。だれよりも強く、だれよりも富と権力を持ち、だれからも愛されるほど美しくなって、

今まであたしをこき使って見下してきたやつらを見返してやりたい・・・。」

鏡は黒く輝く。

<ではおまえたちに、私の絶対的な力を与えよう。その前にわたしのために100人の魂を差し出せ。>

二人は二つに割れた鏡をそれぞれ手に取る。

「でも・・・どうやって？」

<すぐにわかるだろう。>

それだけ伝えると、鏡の煙は消え、声も聞こえなくなった。

二人は顔を見合わせた。

家に帰った彼女は、その鏡の破片を手に取った。

そのとき、妹が部屋から顔をのぞかせる。

「だめよ、寝ていなさい。そうしなければあなたの病は治らないわ。」

彼女が妹にそう言ったときだった。

<あの妹がいなければ、おまえはもっと楽な暮らしができるのではないのか？>

あの声が聞こえる。少女はあわてて鏡を見た。

<あの娘はどのみち先が短い。>

「でも・・・」

ふと、少女の頭の中に、今までの苦勞がよぎる。

この子が寝ている間に、アリのように働いてきた自分の惨めな姿。

鏡を覗き込むと、やせ細った少女の顔が映る。

美しくない。

少女は首を振った。

そして村の同じ年代の少女たちを思い浮かべる。

美しい服を着て、両親がいて、年をとるごとに祝福され、

村のお祭りで楽しげに踊る少女たちの姿を。

「あたしも・・・あたしも・・・あの中の一人でいるはずだった」

<そうだ。>

「あたしは・・・もっとうつくしいはずだった。」

<おまえの言うとおりの。おまえはもともと美しい娘だ。

おまえの美貌があれば幸せもつかめるはずだ。しかしそのために犠牲はつきものだ。

もっと美しくなるにはドレスも靴も必要だろう？そのためには金も必要だ。

けれど私の力さえあれば、おまえはほしいものをいくらでも手にすることができる。>

その瞬間、娘は妹に鏡の破片を向けた。

「あなたの魂を、あたしにちょうだい。」

少女がそういうと、鏡の黒い煙は妹を包み込んだ。

妹の顔からはあっというまに血の気がなくなり、

すぐに青白い人形のように床に横たわった。

<これで一人目だ。>

少女は鏡に向かってにっこり笑った。

一方、貴族の娘も小言がうるさい世話係の一人の魂を鏡に与えた。  
次の日の朝、再び娘と少女が顔をあわせると、話題はそのことばかりだった。  
次の日も、そのまた次の日も、魂を鏡に食べさせ、  
だれを生贄にしたのか、その話ばかり続いた。  
やがて二人はその鏡の力を手にいれたら、一緒に魔女になろうと約束をした。  
世界一の魔女になって、この世界を自分たちのものにしてやろうと誓った。  
「あんなのような汚らしい娘が、どうやってお嬢様に付け入ったの？」  
屋敷で他の侍女たちは、さかんに少女の陰口を叩いた。  
しかし少女には何も怖いものなどなかった。  
すべて消してしまうことができるのだ。

それから一ヶ月がして、貴族の娘が都に戻ることになった。  
そして娘は侍女としてその少女を連れて行くことにした。  
二人はもう何もこわくなかった。  
都にきてからも、二人の話題はどのように世界を征服していくかということばかりだった。そして人知れず、魂を鏡に食わせた。

そんなあるとき、貴族の娘に突然の幸せが舞い込んだのだった。  
国王との縁談の話だった。娘はとたんに世界を自分のものにするということに興味がなくなった。

なぜなら、国王のお妃になってしまえば、その目的も半分かなったようなものなのだ。  
そしてだれもが娘を大切に、愛してくれるのだ。  
娘は日をおうごとに、ますます美しさに磨きをかけた。  
一方彼女は、そんな娘の姿をよく思わなかった。  
そして鏡の中の自分を見る。

「あたしもあの人と同じように、舞踏会で国王陛下に何度もお目にかかったこともあったのに、どうして陛下はあたしではなくあの人を選ぶのかしら。」  
「そう悲観することはない。憎しみを失ったものに、私の力は与えられない。  
この力は今のあの娘には継承できないだろう。おまえが独り占めできる。」  
その後、娘は彼女に話を持ちかけた。

「もうこんなことはやめましょう。人の命を奪うのはよくないわ。  
あなたもこんなことで手を汚さず、幸せを手にしたほうがいいわ。」  
彼女は裏切られた気持ちでいっぱいだった。  
そしてあっというまに娘は国王のもとに嫁いでいった。  
華やかな結婚式で、彼女は娘を祝福する傍ら、嫉妬と憎しみと怒りでいっぱいだった。  
「これであたしは一人ぼっちだわ。あたし一人、幸せを手にはできずに。」  
「ならば奪えばいい。あの娘を、100人目のいけにえにすればいい。」  
それを聞くと少女は鏡に笑いかけた。  
いつしか99人の人間が鏡の犠牲になっていた。

そして時間が流れ、王妃となった娘には子供が生まれた。

真っ白な肌に、真っ赤な唇の王女だった。

名は白雪姫と名づけられた。

「あなたにお祝いを言いに来たの。」

彼女は王妃となったその娘に微笑んだ。

娘は古い友人が訪ねてきてくれたことを喜び、二人は何時間も語り合った。

「けれどね、あたしはあなたが許せないの。」

しかし、最後に彼女はそう言った。

そして鏡の片割れを娘にむける。

娘は首を振った。

「どうして？・・・友達だと思っていたのに。」

「あたしはあんたを友達と思ったことなどなかった。」

「・・・わたしはあなたと一緒にいて楽しかったのに。」

「・・・あたしも、あんたと魔女になって世界を自分のものにしてやろうと思っていたのに。裏切ったのはあんただわ。」

鏡はあっというまに黒い煙で娘を包み込み、

あっというまに魂をうばった。

少女はその場に横たわる王妃を・・・娘を見た。

「・・・これで、100人。」

そうつぶやいた瞬間、少女は娘の笑顔を思い浮かべる。

しかし突然、不思議な喪失感に襲われる。

「・・・この女は友達でもなんでもない。」

自分にそう言い聞かせる。けれど、不思議と悲しさがこみ上げる。

・・・友達だと思っていた・・・

娘の言葉がこだまする。

「友達？」

少女は周りを見渡す。だれもいない。

娘がいなくなって、少女は一人になった。

一人ぼっちになった。妹ももういない。

「あたしは・・・あたしは・・・」

ふと、ゆりかごの中にすやすやと眠る美しい若き王女を見た。

そしてもう一度自分の顔をその鏡に映す。

なんて醜いのだろう・・・少女は思った。

<後悔してももうおそいよ。おまえは100人の魂を私にあたえた。

おまえは魔女だ。世界から恐れられる魔女だ。その力で富も権力も、美しさもすべて手にはいるだろう。そうすればみながおまえを愛してくれる。>

そして少女は鏡からでてくる煙とひとつになった。

そして、彼女は次の王妃になった。  
見違えるくらい美しくなり、国王の目にとまったのだ。  
彼女は幸せなはずだった。けれどもなにかが物足りなかった。  
おまけに、前の王妃の娘の姿を見るたびに、胸をかきむしりたくなる気分になるのだ。

それからもずっと  
人々から愛されて育つであろう、美しい白雪姫に嫉妬しない日はなかった。  
そして今日も鏡に語りかける。

「鏡よ鏡、この世で一番美しいのはだあれ？」